

中学生・高校生のみなさんへ おすすめの本



2017 年 10 月発行 発行者：枚方市立中央図書館 図書館児童サービス委員会
〒573-1159 枚方市車塚 2-1-1 電話 050-7105-8121 FAX072-851-0962

* このリストは 2016 年に新聞等で紹介された本のなかから 14 冊を選んだものです。

* F は日本のものがたり、N は外国のものがたり、数字は NDC による分類を表しています。

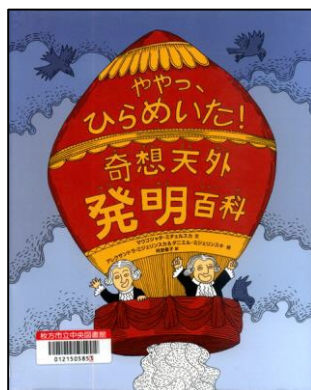
やっ、ひらめいた！ 奇想天外発明百科

マウゴジャタ・ミCHEルスカ／著
アレクサンドラ・ミジェリンスカ／画
ダニエル・ミジェリンスキ／画
阿部 優子／訳 徳間書店 507

駅鈴（はゆまのすず）

久保田 香里／著 坂本 ヒメミ／画
くもん出版 Fークホ

人類は、生活をより便利に、より豊かにしたいという発想と欲望から、様々なものを「発明」してきました。数限りない発明の中には、実用化されたものも奇想天外すぎて発想だけで終わってしまったものもありました。この本では紀元 1



世紀、古代ギリシャの数学者・物理学者のヘロンが考えた「古代の神殿の自動ドア」から現在開発中の「3D プリンタで作る月面基地」まで、これまでの奇想天外な発明について、その仕組みがわかりやすいイラストと文章で紹介されています。

奈良時代、京や国府から出される使者は駅使（はゆまづかい）と呼ばれ、駅家（うまや）という施設で馬を乗り換えて休息をとっていました。近江国（現在の滋賀県）にある篠原駅家（しのはらのうまや）の駅長（うまやのおさ）の娘である小里（こざと）



は、女の子でありながら祖父や父のような駅子（うまやのこ）になりたいと願っていました。天平 11 年（739 年）のある日、小里は若見（わかみ）という駅使見習いの青年と出会います。二人は親しくなっていきますが、若見は親王に仕えることになり駅使の役目から離れ、小里も駅家から去らなければならなくなります。目標に向かって前に進む少女の姿を、奈良時代を舞台に爽快地描きます。

自分で考えよう

世界を知るための哲学入門

ペーテル・エクベリ／著

スヴェン・ノードクヴィスト／画

枇谷 玲子／訳 晶文社 104エク

「哲学」と聞くと、なにかわからないけど難しいものだ、と感じる人が多いのではないのでしょうか。もし「どんな時でも嘘はついてはいけないの?」「幸せってなんだろう?」と考えたことがあるのなら、既にものを哲学的に考えたことがあるということなのです。この本では哲学的にものを考えるということがどういうことなのか、哲学者と呼ばれた人々が今までどんなことを考えてきたのか、ということについて書かれています。哲学的にものを考えることは生きる上でおいに役立ち人生を豊かにしてくれる、という著者のメッセージが伝わる1冊です。



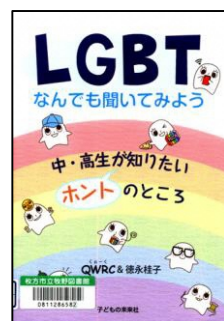
LGBT なんでも聞いてみよう

中・高生が知りたいホントのところ

QWRC&徳永 桂子／著

子どもの未来社 367.9

世の中にはいろんなセクシュアリティ（性のあり方）を持った人がいます。異性を好きになる人もいれば、同性を好きになる人（レズビアン「L」、ゲイ「G」）もいますし、どちらの性も好きになる人（バイセクシュアル「B」）、恋愛の気持ちを持たない人もいます。身体の性と心の性に違和感がない人と違和感がある人（トランスジェンダー「T」）もいます。この本ではそんな性に関するお悩み相談からカミングアウトの方法まで、中高生からの50個以上の質問に答える形でLGBTの「ホント」をわかりやすく解説しています。またLGBTの問題に限らず、「ふつう」ということに縛られないで自分らしく生きる大切さを教えてくれます。

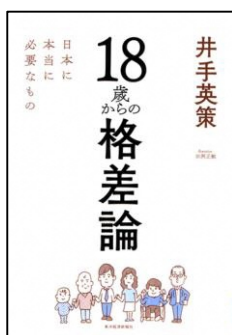


18歳からの格差論

日本に本当に必要なもの

井出 英策／著 東洋経済新報社 361.8イテ

現在の日本社会を語る時、どんな言葉を思いうかべますか？なかには「格差社会」や「ブラック企業」「下流老人」という言葉を挙げる人もいるかもしれません。著者は、まさに私たちは所得格差の広がりによって人々が分断された社会に生きていると言います。この本ではこうした社会がどうして生まれたのかについて述べ、これを解決する1つの案が示されています。18歳から政治参加できるようになったとはいえ、社会についてよく分からないことも多いかもしれません。この本は、みなさんが社会について考える時の材料としてきっと役立つことでしょう。



人生の答えは家庭科に聞け！

堀内 かおる・南野 忠晴／著

和田 フミ江／画 岩波書店 375

変なタイトルと思ったかもしれませんが、「家庭科」は調理実習だけではなくて人間が経験するあらゆる分野を扱っている教科です。例えば、「もう子どもじゃないからアルバイトだって自由にやりたい」「友達がカレシの言いなりになっている」「おじいちゃんと話すのが面倒くさい」、こういったことを自分なりにどう考えていくか、その方法を考えるのも家庭科の分野です。この本では、わかりやすく漫画を入れながら、家庭科の先生2人が、家族のこと、恋愛のこと、お金を稼ぐこと、支えあって生きることなど、今とこれからの人生の問題について考える時のいろんなヒントや考え方をアツク紹介しています。

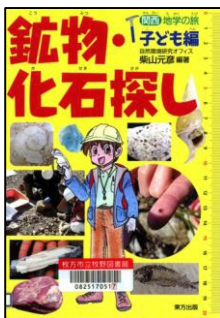


鉱物・化石探し

関西地学の旅 子ども編

柴山 元彦／編著 東方出版 459

私たちが日ごろ山や河原で何気なく見ている石の中に、実は鉱物や化石が入っているかもしれません。この本は、鉱物や化石の基礎知識やその見分け方、さらに鉱物探しや化石探しに適した川原や山、海辺など、関西エリアの具体的な場所を地図付きで詳しく紹介しています。また、野外だけでなく、日ごろ何気なく通っている梅田や京橋などの駅や、商業施設の壁や柱にもたくさんの鉱物・化石を含む自然の石が使われており、その場所も写真付きで解説しています。この本を片手に鉱物・化石探しに出かけましょう！



櫛（たすき）を、君に。

蓮見 恭子／著 光文社 Fーハス

女子駅伝は、ハーフマラソンを5人で走り、櫛（たすき）を手渡していく陸上競技です。中学校時代ソフトボール部だった倉本歩（あゆむ）は、陸上部として駅伝に参加し、全国大会の優勝者である瑞希（みずき）に憧れて駅伝の選手を目指します。入学した高校の陸上部は選ばれた優秀な選手しか入部できないことになっていましたが、走りたいという熱意を認められて入部します。その陸上部には、心を閉ざして走ることを楽しめなくなった瑞希が在籍していました。地区予選での個性豊かな主人公たちが櫛を繋ぐために走る様子は臨場感があり、駅伝という競技を満喫できます。



セカイの空がみえるまち

工藤 純子／著 講談社 Fークト

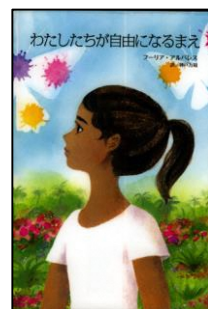
中学2年生の空良（そら）がたまたま立ち寄ったのは、差別を声高に叫ぶヘイトスピーチが聞こえる街でした。空良は半年前に父が失踪した時にSNSで言葉の暴力にさらされ同級生に心を閉ざしていましたが、この街にその時と同じ空気を感じます。一方、空良の同級生で野球部の改革に燃える翔（かける）はそのコリアンタウンに住み、母親が誰かわからないという出生の悩みを抱えていました。空良は翔と会うことによって差別に負けず様々な国籍の人々と助け合って生きていこうとする住民の姿などを知り、勇気づけられます。空良たち中学生が、家族と自分自身を見つめる姿を描きます。



わたしたちが自由になるまえ

フリーア・アルバレス／著 神戸 万知／訳
ゴブリン書房 Nーアル

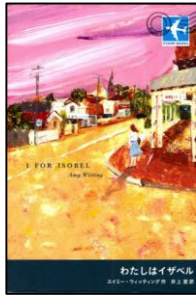
11歳のアニータは自分の暮らすドミニカを自由に素晴らしい国だと信じていました。しかし、祖父母に続き、いとこ一家が逃げるようにアメリカへ渡ったことをきっかけに、何かが起こっていると不安に思いはじめます。やがて父たちが独裁政権に抵抗する運動にかかわっていることを知り、これまで感じていた自由な気持ちを見失い、言葉を発することができなくなります。大統領暗殺に加わった父たちは連れ去られ、アニータは母と共に匿（かくま）われた知人の家で、思いを日記に綴るのでした。緊迫した日常の中で、ささやかなことに幸せを感じながらアニータが成長していく姿を描きます。



わたしはイザベル

エイミー・ウィットティング／著 井上 里／訳
岩波書店 **Nーウイ**

イザベルは母親からの愛情を知らずに育ちました。姉は誕生日プレゼントももらえるのに自分はもらえず、成長しても、自分が「普通の人」として正しく振舞っているのかわかりませんでした。そんな彼女の心のよりどころは読書でした。様々な人々と接する中で、自分には言葉という武器があることにイザベルは気づきます。苦悩しながら成長していくイザベルの姿が丁寧に描かれています。「自分」として生まれた以上、「自分」という存在から逃れられません。読み終わった後、「わたしはイザベル」というタイトルにこめられた意味をもう一度考えてみてほしい作品です。



世界を7で数えたら

ホリー・ゴールドバーク・スローン／著
三辺 律子／訳 小学館 **Nースロ**

12歳のウィローは天才的な頭脳を持っていますが、人間関係をうまく築くことができません。そんな彼女を、一番の理解者である養父母の事故死という突然の悲劇がおそいます。ウィローは悲しみにふさぎこみ大好きな植物への興味も失ってしまいますが、やる気のないカウンセラーのデルやひよんなことから友だちになったベトナム人のマイとその家族たちから、一步を踏み出す勇気をもらいます。そしてウィローは、デルの住むマンションの荒れた庭に緑を復活させる計画を思いつき、デルやマイらと奔走します。やがて彼女の行動はたくさんの人を結びつけ、彼らの生き方さえも変えていきます。



十三番目の子

シヴォーン・ダウド／著 パム・スマイ／画
池田 真紀子／訳 小学館 **Nータウ**

一人の女が産んだ十三番目の子を十三歳の誕生日にいけにえにささげれば、その子の命と引換えにむこう十三年の繁栄を約束しよう。これがイニスコール島の漁村に伝わる暗黒神の呪いでした。十三番目の子として生まれた少女ダーラは、村人はおろか家族とも何のつながりも持たずにただいけにえとして育てられました。しかし、死すべき運命の日の前夜、生みの母親と実の兄に会った彼女は自分の身の上について衝撃の真実を知ります。そして、いよいよダーラがいけにえとして命を絶たれようというとき、三人の家族はどんな行動をとったのでしょうか。もし運命というものがあるなら、それを打ち破るものはなんなのでしょうか。読後、深い余韻とともにそんなことを考えさせてくれる物語です。



世界一のランナー

エリザベス・レアード／著 石谷 尚子／訳
評論社 **Nーレア**

エチオピアの田舎に住むソロモンは小さいころから走るのが大好き。11歳になったソロモンはじいちゃんに連れられ、首都アディスアベバまで35キロの道のりを歩いて向かいます。ところが町でじいちゃんが病気になる、家族に知らせるために急いで村に戻ろうとして乗ったバスが故障し、ソロモンは走って家に帰ることを決心します。都会と村との生活の違いやエチオピア内戦に係わるじいちゃんの過去、家宝を狙うずるい親戚のたくらみなどがソロモンの視点で語られます。そして華やかなオリンピック選手のパレードを見て、ソロモンは将来ランナーになる決心をします。尊敬するじいちゃんの導きによってたった数日の出来事がソロモンの人生を運命づけたのでした。

